

社会と人生

1. 人間が社会を創り、社会が人間を創った

人間は「人の間」と書きますが、この単語は人類の性格を実に端的に表現しています。個々の人間は社会との関わりを持たないと、人間らしく生きて行くことができません。我々と 600 万年前の祖先を共有するチンパンジーも群れで協調動作をしますが、あの程度の協調動作では人間が営んでいるような高度な社会の建設・維持・発展を行うことはできません。

AHK0103「サルと別れた日」にアカギツネを人為淘汰して「イヌ」に変えるのに 20 年間しか要しなかった研究事例が紹介されていましたが、人間も自らが創り上げた社会によって強く人為淘汰された生物なのです。端的にはチンパンジーの場合はメスを巡ってのオスの闘争のため、オスの体重はメスの体重の 2 倍(ドドの場合は 10 倍) もありますが、人間は異性を体力で奪い合わないために、男と女の体重比は現在見る程度の差に収まっています。

もう、我々は原始人ではありません。集団で作りに上げた人間社会に高度に依存した社会的生物に進化しているのです。とは言っても、僅か 6,000 年前頃に原型が出来て急速に高度化した社会に、人間が遺伝子レベルで適応しきれている筈はありませんから、そのギャップに悩み苦しむことも多々あります。

例えば、人間は 20 人程度の身内の小集団や、小集団を幾つか束ねた 200 人程度の集団で生活していた血縁集団で行動した期間が何万年とあり、都会で血縁を離れて地縁で生活するようになって僅か数千年しか経過していませんので、本当に親しくなれる人数は数十人程度、顔を覚えて或る程度知り合える人数は数百人程度という限界が平均として存在していると言われます。

だが、この限界を克服してより多くの人たちの顔と名前を覚えることで、社会的な活動の範囲が広く効果的になることも確かなことです。シュメルからローマ帝国時代当たりまでの古代社会では、相手の名前を称えることにより、相手の力を自由にできると考えられていました。確かに自分の名前を覚えてくれた相手には、力を貸そうという気になるでしょう。相手の名前を覚えることは、とても有効なことなのです。

ナポレオンに名前入りで声を掛けられ、彼に心酔して献身したフランス軍人たち、一度会った何千人もの人たちの顔と名前を覚えて選挙民たちを感激させたクリントン大統領など、優れた政治家や経営者たちは個人個人の名前を大事にして成功しています。

さて、貴方は現在は親の保護の下で本格的な社会生活に入るための各種の教育(学校教育だけではないもっと幅広い)を受けていますが、20 数歳ともなれば独りで社会生活に飛び込んで行かねばなりません。その時に近視眼的な認識や行動を取らないために、社会とは、人間とは、どのような特性と性格を持ち、両者を調和させるにはどう考えたらよいのか、とても奥深い、難しいテーマではあり、また、人によって意見が大きく異なっていますが、人生の先輩として、私の理解するところをコーチしましょう。

2. 若者よ、「自分探し」するな!

元東大学長、現学習院大学教授・佐々木 毅氏は、自分は何をしたいか迷う若者の「自分探し」に異議申し立てをする。「若い人たちの自分探しは何時・何処にでもあったでしょうが、今の日本では社会現象になっている。そもそも自分はよく分からないというのが人生の基本なのに、探せば石ころみたいに見付かるんですか。自分がモノのように何処かにあると考えるのは極めて幼稚で、知的に洗練されていない匂いがします。……自分探しを人生のメインテーマにして良いのか。残念ながら世の中はあなたのため

にある訳ではない。まず職探しをして、飯が食えるようになってからじっくり取り組めばよい。人間は**社会的存在**であるということから逃れられません。**社会と自分の関わり合いを作るのが人生にとって最大のテーマ**のはずです。……社会との出入りを何度も繰り返しながら、自分のストック(技能や人脈)を増やし、社会との関係を組み替えていく。社会のネットワークに入らずに、気に入らない、幸せになりたい、というのとは違います。必要なのは自分を突き放すこと、露骨に言えば自分の価格、評価をよく見ることです。自分を相対化する道具として職業を捉える。その上で、自分探しより、自分活かしを考えるべきでしょう。……大學ではまず、比較されることに慣れるため、“自己表出デビュー”させることが大切です。王子様、女王様のガラス細工の自分を壊して社会に送り出す。幸い、学校は社会的、経済的リスクを一切負わず自分をみせられるのが特徴ですから」

(「若者よ、『自分探し』をするな」佐々木 毅／日本経済新聞 2007/6/18)

若者たちに対して、もっと率直に助言している記事が 2014/7/28 号の日経ビジネス誌 p114 にありました。著者の古森重隆氏は富士フイルムホールディングス会長です。大衆に写真を普及させ、カラーフイルムやインスタントカメラで世界市場を制覇し、最初のデジカメを世に出した写真界の王者イーストマン・コダック社が、デジカメやスマホに写真や動画の需要が移って行く流れに乗れず、企業として破綻する状況下で、同じ写真フイルムを本業としながら市場の激変に新市場開拓と企業構造の変革で乗り切り、社業の一層の発展の原動力となった人物です。氏は行き過ぎたヒューマニズムで子供たちを無競争、無菌状態で育てる教師が多い現在の小・中・高等学校の現状に抗議して、次のように述べています。

……競争がもたらすものは、進歩や成長だけではない。人間は他者との競争を通して自分自身の強みや弱みを知り、人生における己の武器と立ち位置を見出していく。幼少期、周囲には腕っ節の強い子供、勉強のできる子供、ひょうきんな子供、誰にでも優しい子供など、様々な個性を持った友人がいた。そして喧嘩したり、虫を捕ったり、試験を受けたり、日々の競争の中で自身の個性や差異に気付き、居場所を見出した。勉強やスポーツが苦手でも、笑わせることが得意であれば人気者になれるかもしれない。喧嘩が弱くても歌や絵が上手であれば、別の世界で勝負できるかもしれない。**何が得意かは競争があって初めて見える**。「自分探し」という腑抜けた言葉が広がっているのは、競走や戦いが身の周りにないからだ。競争は自分の実力を測る物差しで、生きる上で必ずつきまとうものだ。ところが教育現場には悪しき平等主義がはびこっている。運動会の短距離競走で順位をつけず、並んでゴールさせるような小学校が存在するようだ。試験の成績を張り出すことに眉をひそめる教育関係者も少なくない。勝負に負ける人間に配慮してのことだろうが、皆で仲良くというぬるま湯の世界は真の優しさではない。好むと好まざるとにかかわらず、社会に出れば絶え間なく競争が続く。会社に入れば、同期との競争や他社との競争が待ち受ける。グローバル化が進行している今は海外との激しい競争も日常茶飯事だ。中国やインドなど新興国の若者たちは熾烈な競争社会を生きている。彼らの目の色は違う。キラキラ、ギラギラしている。子供たちから競争を排除して、何れ訪れる世界との熾烈な競争で勝ち残っていけるとでも思っているのか。もちろん、勝負の舞台から降りることは自由だが、降りたところで競争がなくなる訳ではない。国や会社、チームや組織、そして自分自身や愛する家族、友人を守るために、戦わねばならない場面は確実に訪れる。その時に尻尾を巻いて逃げ出すのか。重ねて言うが、競争もない、結果の差もつけないという優しさは真の優しさではない。生き過ぎたヒューマニズムは動物としての活力を奪い去る。今のように、子供たちを無競争、無菌状態で育てることは将来に禍根を残すことになる。……

第二次世界大戦での日本の敗戦(1945)において私は中学1年生、日本の大部分の都市は米国の空爆により灰燼に帰していました。生産手段の殆どを失った日本人はその日その日を生きるために必死の努力をしました。当時の人々各自が行うべき目標は単純に「生き延びること」でした。

この時期は若者も「自分探し」などやる必要はありません。やることは、この逆境を「生き延びること」で

した。とても単純明快な目標で、こうなると人類の中でも特に**協調性に富む日本人**は一致協力して目標に向かう集中力を発揮します。戦後数ヶ月後に日本を訪れた外国人の多くが、**日本人の奇妙な明るさ**に戸惑ったといわれます。戦禍に見舞われた他の国々では、人々が混沌の中で何をなすべきかを知らず、首をうな垂れているのに、ここ日本では人々ががむしゃらに働いていることを奇異に感じたとのこと。これには、古代より多くの重大な自然災害に見舞われる地理的条件の国土に生きてきた日本人の打たれ強さ、しぶとさ、生命力がこのような極限状態で見事に開花したのでしょう。

米国の寛大な食料支援や技術供与の恩恵を受け、幸運な「朝鮮戦争(1950~1953)」特需にも助けられ、他国が可哀相な日本を大目に見てくれたお蔭で、輸入を妨げ輸出を奨励する重商主義的国家政策を長期間と続けることを許され、本来潜在力がある日本は見る見る経済力をつけて米国に次ぐ世界第2位の **GDP(国内総生産)**を達成し、遂には「**冷戦は終わった。勝ったのは日本だ**」と言われるまでの経済大国にまで復興・発展しました。明治の先人たちも、日本が世界を驚嘆させるほどの発展をするとは、夢にも考えなかったでしょう。もはや「生き延びること」に何の苦勞もありません。ここで日本人は目標を見失い、怒濤の発展は止まりました。それが現代です。貴方には、ごく身近な時代に、日本にそのような世界を震撼させるように輝いた時代があったことなど、実感が持てないでしょう。

今の国際線の飛行機に乗ってごらんください。30年前の日本のビジネスマンの多くは座席で読書し、書類を書いていた。今の日本のビジネスマンの多くは、スチュワーデスがくれる只酒を飲み、寛いでいます。座席で読書し書類を書いているのは韓国や中国のビジネスマンです。これで国際競争に勝てるのですか。

J.M.ケインズの言う「**生きるために働く必要がなくなった時、人は人生の目的を真剣に考えなければならなくなる**」は至言です。貴方も前出の佐々木毅氏の適切な助言の意味を噛み締め、或る程度の割り切りを以て人生を乗り切ってください。

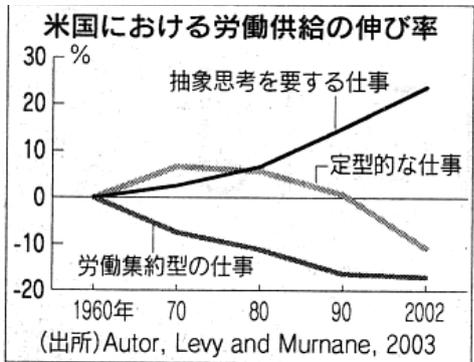
3. 格差社会は繰り返された社会現象

1960年代から1997年(勤労者の賃金が最高水準を打った年)の間の日本は、終身雇用制に支えられた日本国民の9割が「自分の中流階級に属する」との自覚を持てた「**一億総中流**」といわれた「日本人の最も幸福な時代」でした。ソ連のゴルバチョフ首相は、「**日本は世界で一番成功した社会主義国家だ**」と感嘆したように、経済的な自由度は低かったものの、一般国民の生活は豊かで平等性が高かったのです。

しかし、最初は平等性が高い社会でも、同じ社会体制が続くと、必ず同じ努力の投入に対しての収益に格差が強まってくるのが人間の社会の特性であるように見えます。このことについては、AHK221「**マタイ効果と格差の拡大**」で詳しく述べていますので、後ほどご覧ください。

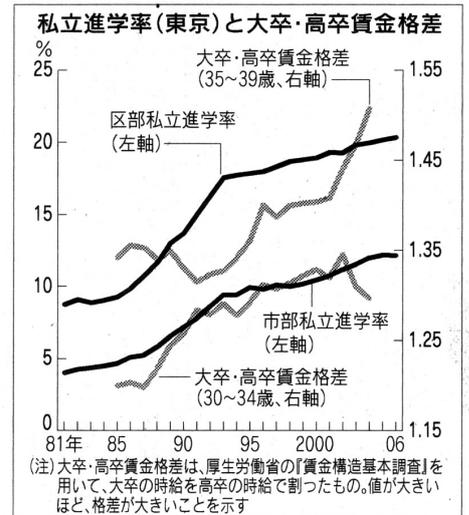
先進国で広がりつつある所得格差

……「コンピュータの社会への普及で労働の性質の違いが大きな所得格差を生む原因になっている。コンピュータが肩代わりできない**抽象思考を要する仕事**に就く人々は、例えばデータベースを活用して弁護士は短時間で網羅的に判例を検索・調査でき、CADで技術者は短期間で製品開発できる。高度な教育を受け独創性を備えた人々の生産性の大幅上昇の結果、賃金も急上昇した。



顧問弁護士、ファンドマネジャー、医師は米国の全労働者の中で、最上位の所得層を形成している。一方、定型的な仕事、オフィスでいえば情報の分類、整理、計算、保存、検索、処理などコンピュータが得意な分野の仕事をする事務職、秘書、会計係、保険数理士といった人々は駆逐された。そのことは前頁右図の定型的な仕事の雇用量がコンピュータの普及が特に進んだ1990年頃から減ってきたことで

判る。また、コンピュータは人手を要する労働集約型の仕事、トラック運転手、レストランの接客係、空港でのパスポートチェックなどさほど高い教育を必要としないが対人関係で臨機応変な処理が必要な仕事は苦手であり、1960～1990年にかけて雇用量が減ったが、2002年にかけて持ち直し、最近では増えている。こうしたコンピュータ普及で仕事は二極化し、所得も二極化した。高度な教育を受けた人たちの生産性向上は望ましく、高等教育の投資リターンはかつてなく高まっている。」……（「先進国で広がる所得格差」MIT(マサチューセッツ工科大学)准教授ディビッド・オーター／日本経済新聞 2007/8/20)



(日本経済新聞 2008/8)

格差が最も顕著に現れるのは、学歴です。右図で「私学進学率」が年と共に上昇していますが、これは年齢が上がるに連れて「大卒・高卒賃金格差」が大きくなる実態に親たちが反応して、私立校への進学率が高くなりつつある状況を示しています。過去の歴史を見ても、個人間の経済格差は人間社会の影の部分ではあるが取り除くことが難しく、格差をなくすのに成功した共産主義やナチズムの社会は人間性の抑圧というもっと酷い副作用があることを露呈してしまいました。現在の日本は、バブル時代の「一億総中流社会」から「格差が大きくなる社会」へと移行中の時期に当たっています。その実情を知った上で、社会の何処へ自分が位置すべきか、自分なりの人生観を確立する必要があります。

「知識に対する投資は、常に最高の利息を生む」ベンジャミン・フランクリン

4. グローバル化の波に呑み込まれるな！

インドと中国は古代からの人口大国で、両国合わせて常に世界人口のおよそ半分を占めていました。現在、世界の総人口は約72億人、その中で中国は14億人、インドは12億人の人口を有します。両国とも、18世紀からの産業革命・近代化の波に乗れず、インドは中世の封建領主による「領主の私物化国家」から「同じ民族という求心力で纏まった民族国家」にも移行せずに2世紀間にわたって後進国の立場に甘んじさせられていました。

中国は冷戦構造の中で共産主義経済圏に閉じ籠もっていましたが、1978年の開放政策により自由主義経済圏に門戸を開く決定を行い、長い助走期間を経て最近では**世界の工場**として最初は年率10数%、現在でも7%台の高度経済成長をしており、今やこの国が世界のスーパーパワーになるのを誰も止めることができません。インドも予てから世界的に評価が高かった民族の数理能力がIT時代に一気に開花して**世界のソフト開発センター**になり、国民の英語能力の高さから**世界のコールセンター**ともなり、インターネット時代の波に乗って中国の後を追って急成長時代に突入しています。

これまで、先進国といわれる米国、欧州、ロシア、日本の総人口は約10億人、そこへ、この20年間ほどで中・印に東欧、南米等を含めた新興国の約30億人が加わって来て**自由主義経済圏**が爆発的膨張をしつつある過渡的時代が現在なのです。

これまでの米ソを盟主とする冷戦による政治の壁等で分離されていた先進国と後進国の間の障壁が取り払われて、西側先進国の市場に新興国となった嘗ての後進国が統合されます。これがグローバル化なのです。市場統合で参入する側の人口の方が圧倒的に多い事例は16世紀にしかありません。当時は先進地域であるイタリアなどの地中海世界の3,000万人に、英、独、仏、東欧など北方の新興国の5,700万人が加わっています。新興国の生活水準の向上による需要の急増で、小麦の値段が6倍に跳ね上がったという記録がありま

す。今度の経済統合では何の値段が上がるのでしょうか(既に石油、鉄鉱石、石炭、コメ等が急騰しています)。

「賢者は歴史に学ぶ」のですから、当時の歴史を紐解く必要があります。

第二次世界大戦後の日本の復興過程にもヒントがあります。1948年頃、米国人の平均収入が日本人の17倍であるとの数値を私は鮮明に覚えています。高校生の私は「日本人として生まれた以上、一生の間に自動車を持つこともなければ、飛行機に乗る機会もない」と諦観していました。

しかし、前述したような歴史の流れがあって日本は工業国として再興を果たし、敗戦から40年後には米国の鉄鋼産業を壊滅させ、米国の国技ともいえる自動車産業を衰退させています。相対的に給与水準が高い二次産業(工業)を殆ど壊滅させられ、労働者の多くが給与水準が低い三次産業(サービス業)に移らざるを得なくなったために、敗戦後の日本人が羨望し、達成目標とした米国の総中流生活スタイルは経済面で崩壊し、いまや米国では中流階級は絶滅危惧種扱いです。

私は米国社会の荒廃をもたらした主犯の一人は日本ではないかと思えます。日本に経済の門戸を開いたために、アメリカの労働者階級は給与が数分の一の日本の生きる意欲と優れた能力がある労働者に、輸出品を通して職を奪われたのです。その結果、今の米国は酷い格差社会となっています。「貧困の再生産」は益々厳しくなり、「生まれながらの機会の均等」「社会的流動性」は決定的に失われています。2005年の研究では、ヨーロッパやカナダで貧乏な家庭に生まれた子供たちの方が、米国で生まれた貧乏な家庭の子供たちよりも富を築く可能性が高いとの結論が出ています。

「歴史は繰り返す」、今、攻められているのは日本、攻めているのは中国です。

これに対して、国家レベルでの備えと、個人レベルでの備えがあるでしょう。グローバル化とは、物や情報や資本の流通に国境がなくなり、先進国も新興国も全く同じワールドワイドな活動の場で競うことを意味します。先進国の人々はこれまで高賃金を享受しており、新興国の人々は低賃金に甘んじて来たのですから、**新興国でも出来る仕事の賃金は新興国の人々の賃金レベルに収斂して行くのは当然の成り行き**です。労働集約型の仕事は中国等に奪われ、ソフト開発はインドに奪われます。

この社会構造の急激な変化の実相を理解できれば、日本人として個人レベルでグローバル化の大波に呑み込まれないための対策を立てることができるでしょう。

前章は個人レベルの格差問題で、現在は格差が拡大傾向にあると述べましたが、この章では国家レベルの格差問題で、格差は縮小傾向にあると述べています。

5. 社会の不条理にどの程度の関わりを持つべきか

「世界は、哀しみに満ちている。中東では、凄惨な殺し合いが続いている。アフリカでは、何万という人々が飢餓とエイズで死んでいく。『あなたはこの現実から目を背けるのですか?』と、青年は尋ねた。私はその問いに、生真面目に答えた。世界中で今も、罪のない命が失われていることは知っている。

しかしそれは、私の人生とは関わりのない出来事だ、と。

彼は怪訝な顔で私を見た。その青年は、不正義や、暴力や、悲惨な現実を前に苦しんでいた。無力な自分に対し、抑えきれない怒りを持って余っていた。私たちは、世界が不条理なものだということを知っている。だが彼は、それが許せなかったのだ。彼の純真さは心を揺さぶる力があつた。しかし、それを素直に受け入れるには、私は少し歳を取りすぎていたようだ。

人は誰でも、ある種の生き難さを抱えている。それは家族との確執や、職場での鬱屈だったり、異性への実らぬ思いだったりする。私たちは『自由』な社会に生きている。だがそこで、全ての欲望が満たされる訳ではない。社会は、あなたの自由にならない多くの他者によって構成されている。他者もまた自由に生きる権利を持っており、あなたはそれを侵害することができない。人を好きなように操れるなら、全ての願いは叶うだろう。だが、現実には、社会の中の無数の自由を共存させるために、殆どの欲望は予め禁じられているのだ。私たちは往々にして、この生き難さを他に転嫁しようとする。青年は、世界

中の不正義と戦っていた。絶対的な悪に苦悩する自分は、常に純真無垢なのだ。彼は、自分の苦悩が世界を正しい方向に変えると信じていた。更には、自分の手で理想の世界を一举に実現しようと考えた。私が出会ったとき、彼はあるカルト教団の信徒だった。その教団は“救済”の名の下に多くの罪を犯した。数ヶ月後、彼は教団からひっそりと姿を消した。失意の内に田舎に帰り、やがて結婚をし、子供も生まれたと聞いた。

私を含め殆どの人は正義のために生きてなどいない。自分と家族の幸福を守るために生きている。例え遠い世界で多くの命が奪われようとも、私たちの日常は変わらない。だから、ニュースを見ながら小さなため息をつき、日々の仕事へと向かうのだ。理不尽な世界の中で、私たちは目の前にある問題を、一つ一つ解決していくしかない。今なら彼も、そのことが判るだろうか。」

（「日曜日の人生設計／もう一つの幸福のルール／正義のために生きていますか」橘 玲／日本経済新聞 2003/3/30）

このエッセイは私の心に重く響きました。私は文中の「カルト教団」が 2003/3/30 に地下鉄サリン事件を引き起こす前から、この教団に強く関係した知人を持つからです。「オーム真理教」は麻原彰晃教祖のもと、上のエッセイにあるような多数の極めて高学歴の青年たちを信徒とし、富士山麓の上九一色村を基地として非合法活動をしました。私の息子の小学校時代からの友人 S 氏の家族は、次男の入信を切っ掛けに父親の大腿部肉腫を同教団の医師団による高温療法に望みを賭けて家族で入信し、治療を受けました。しかし、彼らが見た治療現場は「現代医療で治らない難病の人たちが、入信して次々快癒している」との教団が流すメッセージとは全く逆の、治療患者は全員死に、解剖された臓器が散らばる恐ろしく、悲惨な現実だったのです。既に信徒たちと共同生活に入っていた S 氏一家は密かに計画を練り、ある夜、脱出大作戦を執行して成功裏に一旦金沢へ逃れ、金沢大学の治療を受けます。見付かったら殺害される危険性が極めて大きかったのです。家内と私は連絡を受け、密かに彼らを訪ねました。警察に訴えても犯罪としての証拠が提出できないため、この時期は相手にしてくれませんでした。

事件後、一家は名古屋の本山の自宅に戻り、S 氏の父親は念願の水彩画の個展を開いてから亡くなりました。一家の次男の青春の一時の挫折からカルト教団に入るが、そこも真の解脱の場はなかったのです。「宗教」は信徒の財産を徹底的に搾り取ります。「宗教」が現代医学で治らない患者を治したと宣伝したら、嘘だと思ってください。口では何とでも宣伝できるのです。これがこの事件で私たちが知った「現代の宗教」の本当の姿だったのです。

このエッセイは、私の従兄弟の H 氏の長男が勤めていた大手電機メーカーを辞めて、悲惨なイラクの人たちを支援すべく NGO ピースウインズ・ジャパンに入り、戦乱のイラクに志願して赴き、週刊誌に紹介されたことにも関わりがあります。掴まって喉を掻き切られた人もいた最大級の危険の中で任務を果たし、彼は後日、無事帰国し、H 夫妻はホッと安堵の息を継ぎました。

6. 自分を活かすとは

……以下、自伝『蝦蟇の油』に沿って、その成長を追ってみよう。♪うちの金平糖さんは／困ります／何時も涙を／ポーロポーロ♪。品川の森村学園から小石川の黒田尋常小学校に転校した明は「知恵が遅れていた」ために、よく泣かされた。……泣き虫の金平糖さんが逞しい少年に変身するきっかけを与えたのが三年生で担任となった立川精治である。図画の時間。手本を忠実に真似るのが良しとされた時代に、立川はただ「好きなものを自由に描け」といった。

黒澤は「色鉛筆が折れるほど、力を入れ、塗った色を指につばきをつけてこすったりして」懸命に描いた。同級生は黒澤の絵を笑った。立川は怖い顔で教室を見回した。そして画を褒めた。指につばきをつけてこすったことを褒め、赤インキで三重丸をつけた。

またある日、立川は道路だけが書かれた大きな厚紙を教室に持ってきた。「この上にみんなの町を作ろう

ではないか」。黒澤たちは夢中になって、家や並木、生け垣を作った。黒澤は図画の時間が待ち遠しくなった。熱心に絵を書いた。同時に他の学科の成績も急速に伸び、やがて級長となる。副級長は後に脚本家となる植草圭之助。植草もまた「泣き虫」だった。……

黒澤と植草は小石川の立川宅をよく訪ねた。「私たちは先生の家で芸術の香りを食べるように吸い込んだ。黒澤はダ・ビンチとミケランジェロに、私は数々のヴィナス像に魅かれた。そして早熟な二人の青年はツルゲーネフ、プーシュキン、ドストエフスキーの世界にさまよい込んだ」（植草圭之助『わが青春の黒澤明』）。

それから四半世紀。47年7月1日、黒澤明の監督第六作『素晴らしき日曜日』が封切られた。数日後、黒澤はハガキを受け取る。「映画が終わって映画館が明るくなった。客はみんな立ち上がった。しかし、立ち上がらずに泣いている老人が一人いる。…私はタイトルの脚本・植草圭之助、監督・黒澤明という字を読んだ時から、スクリーンがぼやけて、よく見えなくなった」。差出人の「泣いている老人」は立川先生だった。……

「みんな、自分が本当に好きなものを見つけてください。…見付かったら、その大事なもののために、努力しなさい。…きっとそれは、君たちの心のこもった立派な仕事になるでしょう」。……

（「フィルムに描く／黒澤明②」／日本経済新聞 2007/9/9）

……戦後のサラリーマンは先憂後楽。まず心配して貯蓄して人生を読み切る生活が良いとされたが、これからは健全な楽観主義が必要だ。人生は予定通りには行かない。昔の人は「その時はその時」という覚悟があった。変動が来ても慌てない。覚悟があれば楽観的に生きられる。そして「有利」より「好き」を選ぶことを何よりも大事にしてほしい。この職業が有利、例えば医者有利という選択ではなく、この職業、この職場が好きということで選ぶべきだ。あらゆる職業において「有利」を捜すと必ず失敗する。仕事面白いということが幸せ。好きなことをするのが幸せ。「好き」は仕事にも暮らしにもある。「好き」を基本に勇気と決断と覚悟の美意識を持ち直そう。

（「職選びの基準は『有利』より『好き』」／堺屋太一／日本経済新聞 2007/9/1）

二つのエッセイは「自分が本当に好きなものを見つけろ」と助言しています。私はこれに「自分の得意な領域で勝負しろ」を加えたいと思います。多くの場合、「好きなものは得意なもの」という共通性もあります。学生時代にスタートが遅れている人の中にも、将来、大いに伸びる多くの人たちがいます。前述の黒澤明監督もその一例ですし、大學時代に全くパツとせず、スイスの特許庁に職を得て平凡な人生のスタートを切ったアインシュタインは、彼以外の人では構築できなかったろうと評される近代物理学の金字塔・相対性理論を作り上げました。大発明家・エジソンは智慧遅れで小学校教師から見放され、母親が自分で息子の初等教育をしています。彼等は「大器晩成」型の偉人です。

一方で、早熟の天才のまま、一生天才振りを発揮して斯界の頂点を窮め尽くした多くの人たちがいます。人生は長距離競走です。また、人生で成功するには特定の才能が役立つことが多く、それは学校の教育の射程の範囲外であることすらあります。あらゆる学科で高得点を取る必要もありません。先を急がず、着実に必要な分野の実力を付けるようにしてください。

7. 人生を上手に送るためのノウハウ

7・1 債務の連帯保証は絶対にしない：

これは桐生家の家訓です。私の祖父は友人の債務保証の連帯人となって、その友人が破産したために債務を肩代わりさせられて、酷い目に遭ったと聞いています。私の父が、私が大学生の時に、私にそのように伝授しました。私は自分の弟が銀行の融資を受ける保証人になりましたが、血族ならこの程度は仕方がないで

しょう。友人や部下といった血縁でもない人が「連帯保証人になってくれ」と頼みに来た時は、「家訓で禁じられているから」といって断りなさい。それで友情や信頼関係が崩れることがあっても、止むを得ないことと割り切ってください。友情に金銭関係が入ると、それはもはや、友情ではなくなります。友人に金を貸すなら、「それが返ってこなくても良い」と覚悟して、その範囲で貸すようにしてください。

7・2 株は分散投資しよう：

私は嘗てP.ドラッカーの“Concentration is the essential key to the real economic result.”という言葉を目撃して、ヤオハンという海外に多数の店舗を出店した流通業者に……万円の一点集中投資をしました。なんと、この会社は破綻し、私は僅か……万円だけ回収して大損をしました。経営者は天理教信者として有名で、良い人に違いないと信じていました。後で判ったのですが、彼は確かに良い人なのですが、急成長するヤオハンへの新入社員に宗教教育を重点的に叩き込み、実務教育は殆どせずに各地の実務に就かせていたそうです。まるで、戦争中の「皇国軍人の精神」そのものですね。オーム真理教、天理教と、私の「新興宗教」に対する不信感は確固たるものとなりました。

これに懲りて、次のラウンドでは**徹底して分散投資**しています。窯業、鉄鋼、機械、電機、商業、不動産、金融といった分散振りで、それもできるだけ業界1位に限定しています。「1位は利益を少な目に見せ、2位は利益をそのまま見せ、3位は背伸びして利益を大き目に見せる」(収益力は見た目より遙かに大きい開きがある)というのが、長年の経験則です。これは、経済競争は「ランチェスターの2乗法則」(AHK421)に従う場合が多いためです。「**仕事は集中、投資は分散**」が正解です。私はこれを知るのが少し遅すぎました。貴方は同じ轍を踏まないでください。

7・3 保険・寄付金・補助金の真相：

右の日本経済新聞の記事は、集めた寄付金の90%以上がその団体の内部の人件費等に消費され、目的のアフリカ南部の孤児に届いたのが10%未満に過ぎなかったという内容です。

政府や自治体が補助金を出す場合にも私が仕事として中小企業のために補助金の申請書を書いて判ったのですが、実際に中小企業に渡る補助金と同額くらいの金額が、補助金担当部門の人件費に費やされていると推算できました。

保険も契約者から実際に集めた保険金の内から、契約者に払い戻される金額は50%程度のもので、残りは保険会社の諸々の費用に費やされています。嘗てアメリカンファミリー保険会社が「当社は集めた保険金の65%を契約者に支払っており、契約者にとって一番多くの払戻金を受け取れるお得な保険会社だ」と新聞広告して業界で物議を醸し、二度とその広告が現れることはありませんでした。

私がある特殊な保険事業の企画書に関わった時に、集めた保険料の2割しか払い戻さない計画になっているのを見て啞然としました。

自動車保険や火災保険の様に、発生確率は極めて低いですが、起こったら人生が狂うほどの金が必要になる場合は、保険に加入するべきです。生命保険や病気・入院保険や休業補償保険のように或る程度の確率で発生し、それが自分や親族で負担できる程度の金額なら、保険に加入する必要はありません。

或る程度の金があれば、保険に入る必要がないのです。保険というものは少なくとも50%程度の管理費を予め取られて、残りの金が払い戻されるとの事実を良く知っておいてください。日本人は安全を尊び、保険の

世界の話
集められた善意の寄付金は、どう使われたのか。英国は今、その話題で持ちきりだ。チャールズ皇太子と故ダイアナ妃の次男、ヘンリー王子が設立した慈善団体がアフリカ南部の孤児の支援を目的に寄付金を集めたが、実際に子どもたちに贈られた金額が寄付総額の一割にも満たなかったことが判明したからだ。王子を特に落胆させたのは、団体の不透明かつ高額な人件費だったという。慈善団体とはいえず、働く人も無給というわけにはいかないだろう。だが、集まった善意のほとんどが目的とは違

寄付金の行方は…

う経費に費やされたことに、人々の不信感が高まっている。英国では教会などを通じて、市民が寄付を行うことが日常生活に根付いている。また成功者や名家の出身者が様々な慈善団体を設立したり、慈善団体の名譽職に名を連ねたりすることはよくある。しかし運営がうまくいくとは限らないというわけだ。

(日本経済新聞 2008/6/7)

(守屋 光嗣)

カラクリに無知であるために、世界で飛び抜けた保険大国です。他国の人たちはこんなに各種の保険に加入していません。上手に保険を使いこなしてください。ただ、近年本格化してきたインターネット各種保険は、既存の保険会社に対し同じ保障金額に対し掛け金がおよそ半分なので、保険に関しては事情は変革しつつあるようです。

競輪・競馬の管理費は約3割くらいで、宝くじは右の記事（日本経済新聞 2008/8/26）にもあるように、管理費は約5割強です。気晴らしに買うのなら止めませんが、統計上はとてもお勧めできません。

7・4 歯は一生もの・大事にしよう：

齧歯類と違って、哺乳類の歯は生え続けるようには出来ていません。抜いた跡には代わりの歯は生えま

せん。1本抜くと、入れ歯などで周りの歯に負担が掛かり、長い期間には次々と駄目になる範囲が広がって行きます。私も歯の重要性は60代になってから気が付きましたが、「時既に遅し」。

インプラントがあるのではないかと思うのですが、私の母の歯は60代で数百万円掛けて多数の歯をインプラントにして、「これで一生、歯の心配はない」といっていましたが、95歳の頃には歯肉が痩せて歯を支えることができず、グラグラの状態、次々、脱落しています。治療してくれた歯医者とはとくに死んでおり、文句の持って行き場がありませんでした。やはり、自分の歯を大事にすることです。

7・5 他人からサービスや品物を提供されたらできるだけ早くお礼を伝えよう：

これは人間関係の基本動作として、必ず実行してください。大抵、相手はその返事を待っているものなのです。人間関係を大事にする家庭では、親が子供に躰として叩き込み、全員、これを実行しています。とても大事なことです。今後とも、その習慣を守ってください。

7・6 他人との会話で皮肉やからかいは止めよう：

私もこれで大失敗をした苦い経験があります。発言者はここまでなら相手の許容範囲と思っけていても、知らず知らずの内に相手の逆鱗に触れている場合があります。この種の発言は一切しない方が、人間関係では安全です。

7・7 お世話になっている人には時々ささやかな感謝の贈り物をしよう：

相手が裕福な場合は、アクセサリや鉢物など金のかからないささやかな贈り物で、気持ちを表しましょう。「私は貴方に感謝している」とのメッセージを伝えるのが、人間社会に生きる上での潤滑油になります。

7・8 大事なことは記録に残そう：

「大事な場面は写真を撮るのでなく、目の奥に焼き付けよう」というのは真っ赤な嘘です。確かに、一生の内には目の奥に焼き付けられた強烈な映像もあるでしょう。私にとっての長崎の原子爆弾のように。だが、何百枚もの映像を記憶に止めておけるほど、人間の脳の記憶容量はありません。

やはり大事な場面では積極的に写真を撮り、メモを取り、スクラップブックに記事の切り抜きを貼って、分類して直ぐにアクセスできる「**自分用の活きた記録**」を作って活用しましょう。インターネットでの検索（例えば Wikipedia 等）を過信しないでください。テーマ毎の出来不出来が激しすぎる問題があります。

宝くじ販売4.5%減

地方自治体が発行する宝くじの売れ行きが悪化している。二〇〇七年度の全国の売上高は前年度比四・五%減の一兆四百四十二億円となり、二年連続で前年実績割れ。個人消費の伸び悩みに加え、購買層の中心である高齢者が消費に慎重になっている。自治体は宝くじの収益を公共事業などに振り向けており、売上げ減は財政を一段と厳しくする要因になる。

昨年度も前年割れ 自治体財政に痛手

宝くじは全国の都道府県と名古屋や横浜など十七の指定都市が総務省の許可を得て発売する。売上げの四割は収益金として自治体に納められ、残りの五割弱が当せん金一割強が販売費用となる。収益金は自治体が各地方の教育施設や道路の整備、文化事業に使う。

〇七年度の収益金は全体で、前年度比九・三%減の四千九百九十六億円と二年度連続で前年度を下回った。〇七年度はすべての商品の売上げ高が前年度を下回り、主力商品のジャンボ宝くじでは同四・四%減。売上げの落ち込みが収益金の規模縮小につながっている。

収益金の規模は地方税である自動車取得税に匹敵し、売上げの減少は地方財政上で大きな痛手になる（総務省自治財政局）。今後も売上げ減が続けば、自治体財政の一段の悪化を招く恐れがある。

7・9 5S（整理・整頓・清掃・清潔・躰）を励行しよう：

私のように生産現場で働くと、日本の会社は5Sを徹底的に叩き込みます。そして、その効果は絶大と保障します。整然とした環境にある時、人は考え方も行動も整然とします。毎日の清掃、不用品の整理、必要な物に直ぐアクセスできる整頓は貴方の人生の効率を2割から5割向上させると保障します。清潔面では私は家内から「老人になったら、若い人以上にきちんとした服装をしなさい」と常に助言されています。

7・10 グローバル化時代は英語力が必要：

世界レベルで活動するには、絶対に英語力が必要です。日本でも理科系の学術雑誌の発表論文は、殆ど英語で書かれるようになっていきます。英語で書かれていなければ、学術の世界では存在していないと同じなのです。英語の学習で最も重要なのは、①英語の会話を聞き取るヒヤリング能力、②知っている単語数が多いこと、です。文法の力は、多数の本を読めば、自然に身に着いてきます。

私は高校時代に、今で言う「英語シャワー」で、別な仕事をしながらFEN(米軍放送)を流しっぱなしにして英語の発音に慣れる練習をしました。また、th、v、f、sh等の発音練習を繰り返しました。rとlの違いは遂にできませんでした。母音が日本語と違う(母音は5個)ので、英語(母音は12個)の勉強は日本人にとっては本質的に難しいのです。これらは非常に役に立ちました。ドイツはいち早くこの傾向に合わせて、大企業ではドイツ人同士でさえ会議では英語で話します。あれだけ英語化に抵抗していたフランスでさえ、今ではしぶしぶ英語が通用し始めています。英語が話せませんでは済まない時代になりつつあります。

社会生活を送って行く上で必要な心得に、貴方はいろんな機会に触れて自分の知識として取り入れるでしょう。ここに挙げた幾つかのノウハウは、意外に知る機会が乏しいが大事なことだと私が長い人生で気付いた項目です。自分の子供にこそ教えるべき事柄ですが、この歳にならないと得られないものが多く、祖父の世代から孫の世代に伝えることになってしまいました。

最後に、ちょっと良い格言を見つけたので、ご紹介しましょう。育つ環境の大切さを説いています。

アメリカ先住民のことば (ドロシー・ロー・ノルト)

- 批判ばかり受けて育った子は、非難ばかりします。If a child lives with criticism, He learns to condemn.
- 敵意に満ちた中で育った子は、誰とでも戦います。……with hostility, He learns to fight.
- ひやかしを受けて育った子は、はにかみ屋になります。……with ridicule, He learns to be shy.
- 妬みを受けて育った子は、何時も悪いことをしているような気持ちになります。
……with shame, He learns to feel guilty.
- 心が寛大な人の中で育った子は、我慢強くなります。……with tolerance, He learns to be patient.
- 励ましを受けて育った子は、自信を持ちます。……with encouragement, He learns confidence.
- 褒められる中で育った子は、何時も感謝することを知ります。……with praise, He learns to appreciate.
- 公明正大な中で育った子は、正義心を持ちます。……with fairness, He learns justice.
- 思いやりのある中で育った子は、信仰心を持ちます。……with security, He learns to have faith.
- 人に認められる中で育った子は、自分を大切にします。……with approval, He learns to like himself.
- 仲間の愛の中で育った子は、世界に愛を見つけます。
……with acceptance and friendship, He learns to find love in the world.

(三菱電機健康保険組合 Entrée /2007 Summer 56、p8~9)

以上

補遺：

1. 人間社会の3大要素：言語・法・貨幣

社会的生物はいろいろ存在しますが、人間の社会を特徴付ける要素は「言語」「法」「貨幣」の三つです。これらは、同じ社会に属する人たちが、言語であり法であり貨幣であると認めるからこそ、その社会で通用するのです。認め合わなければ言語は雑音、法は無意味、貨幣は只の紙切れです。

現在のグローバル化世界では英語が事実上の公用語であり、法は各国の間の協定により妥協点を見出し、貨幣は為替レートを介して各国通貨が換算・通用するようになっています。EU諸国では貨幣もユーロに統一しています。これらは全て、社会の約束事を互いに認め合うことにより成立している人間社会の特性です。

人間が来る前の土地は野生の動植物が繁栄する自然物で、誰も所有権を主張する者などいる訳がありません。そこに人間が現れ、勝手に境界線を設けて「これは自分の土地だ」と宣言し、他の人々がこれをその人の所有物として認めるとき、社会が成立したのです。安定な社会では、法が所有権を認め、保護します。法も国により異なり、日本では土地の所有権はその人の個人財産ですが、中国では50年間の使用権であり、西欧諸国では公共性を優先する個人財産権として取り扱っています。出来損ないの成田空港のように、数人の個人地主が財産権を主張して、国家の公益を大きく損なわせることができるような国は日本以外にはありません。法も国によって違うのです。

なお、法は成文法ばかりではなく、文書にされていないがその社会の人は皆知っていて従う慣例法、世間で一般常識といわれるもの、特殊な地域や社会でのみ通用する Local rule なども含まれます。

2. アメリカ社会と日本社会

発言や意思表示：アメリカ社会は多民族国家なので、自分の思っていることをはっきりと発言しないと誰も自分を理解してくれません。はっきり発言することを歓迎し、尊重する精神的風土があります。小学校で一人一人、教壇に上がってプレゼンテーションの訓練をさせるとも聞きます。

日本社会は単一民族(遺伝的には多様性がありますが、精神的な構造が単一なので)なので、発言しなくても相手が自分のことを判ってくれる、慮(おもんばか)ってくれると期待して、互いに言いたいことを控え目にする傾向があります。国際会議で日本人は世界の人たちの会話の中に入ることが出来ず、壁の花になる場合が多いのは残念なことです。新時代の貴方たちは、積極的に語りかけ、心を開いて相手の話を聞ける人間になってください。

組織を離れた社会的活動：アメリカ社会は実業の社会と並んで、大きなボランティア活動の社会があります。小さいときから刷り込まれたボランティア精神で、多くの人が進んで地域などのボランティア活動に参加します。これが社会の安定性を高めているのです。アメリカ人は非公式の人脈をとっても大切に、仮に失業しても別の組織にいる友人たちが仕事を斡旋してくれる場合が多いようです。彼等は会社等の組織から離れたところで堅い人脈を作り、互いに持ちつ持たれつで厳しい競争社会を生き抜こうとします。

日本人は会社等の組織内では互いに協力し合って極めて結束が高く、組織人として高いパフォーマンスを示しますが、一旦組織を離れ、地域に戻るとボランティア活動などに参加する人は極めて少数です。

日本人にとっては、仕事の場である組織は疑似家族だと評されます。人脈も多くは組織内部だけのもので、その組織から離れると殆どの人の人脈は寂しいものでしかありません。退職して地域に戻ってきても新しい人脈を作れる人は限られており、化石化した古い人脈にしがみつき、社会的活動が乏しい第二の人生を送る人が多いようです。

事務系と技術系：「宇宙と物質」の巻頭のケネディ大統領の演説にあったように、アメリカでは「何年までには月に行こう！」「ガンを絶滅しよう！」などの科学技術の目標を国家目標に据えることがよくあります。これは、開拓時代のアメリカ人は誰でも自分で住居や道具などを製作し、維持しなければならず、「私は事務

系なので、そんな手仕事は出来ません」とよくいう日本人とは違い、多くの人たちが基本的に工学的メンタリティを備えているからだと言います。日本では業者に任せるペンキ塗りや壁紙貼りが、アメリカでは一家の主人の仕事になっています。

対する日本では、首相が科学技術の高い目標を掲げて、国民を結束させるなどということは嘗てありません。アメリカの技術者は事務系社員の約2倍の平均給与を得ていますが、日本では事務系社員も技術系社員も同じレベルの給与しか得ておらず、最近の調査では生涯賃金が文系に較べて理系は5千万円少ないのです。恐らく、これは明治維新以来、諸外国にキャッチアップするために既に存在する外国のお手本を日本に導入するだけで良く、自分の力でシナリオを書く必要がないため、保守的な事務系の指導者で済んでいたためでしょう。しかも、会社の上級幹部になるのは多くの場合、世渡りに長けた事務系出身者です。

日本のキャッチアップは1980年代で終わりました。手本がない世界に踏み込んでいるのに、まだ、指導者層の頭の切り替えができていないのでしょうか。

最近、青少年の「理科離れ」が警告されますが、日本の社会情勢の実態を正しく見た親たちの極めて自然な反応であることが、指導者たちには理解できていないのです。

私は青年時代、長らく三菱電機名古屋製作所で製造技術者としての本業の傍ら、発行部数5千部の「名電時報」の最も活動的な執筆者を勤めましたが、編集会議の合間に「管理する側は常に管理される側より偉い」と考えている東大出身の人事部の人たちと議論して、「ノーベル賞を貰うような科学者よりも、その管理者が偉いと言うのか」と反論した覚えがあります。日本の指導者たちの思考回路をはしくも見せた一幕でした。因みに、日本人がよく使う「事務系」「技術系」に対応する言葉は、アメリカでは使われていません。

アメリカ社会は格差社会： 平等を国是としながら、現在のアメリカ社会は酷い階級社会になっています。工場や事務所では、幹部と一般社員の食堂が区別されています。その家族が買い物をする商店も、ハイクラスの人たちと、ロークラスの人たちでは全く違います。日本人はこの点の平等性は全く立派なものです。これでは幹部と一般社員との分け隔てなき意思疎通は望むべくもありません。このため、日本の自動車会社が成功した「カイゼン(改善)」はアメリカの自動車会社には遂に根付きませんでした。

日本社会は「嫉妬の社会原理」により動いています。「出る釘は打たれる」社会なのです。戦国時代に織田信長を始めとする個性的な武将を輩出し、これに懲りて日本人は個性を表に出さない社会を作ったのだとの説があります。これが「ドングリの背比べ」になり、優秀なリーダーを生むことを難しくしているのです。

信賞必罰のアメリカ、差別しない日本： 日本の軍艦では、戦闘時に艦長も兵卒も同じブリッジにいて生死を共にします。アメリカの軍艦では、戦闘時に艦長たちは右の写真のような弾丸が直撃しても死なない厚い装甲の小部屋に立て籠もり、最後まで戦闘指揮系統の確保に努めます。アメリカでは、軍隊での昇進も有能な指揮官を抜擢しますし、信賞必罰で失敗が有れば直ぐに予備役に廻して待機させ、欠員ができればその予備役から適任者を捜して指揮官に起用する敗者復活方式が働いています。

日本軍は能力よりも人間的魅力や清廉潔白なことを尊重し、年功序列で昇進させ、失敗があってもその人間の将来に瑕を付けないように不問として、また次の大事な作戦に起用していました。これは旧日本軍のことでしたが、私は長い人生経験の中で、今でも日本人のメンタリティは殆ど変わっていないと感じています。

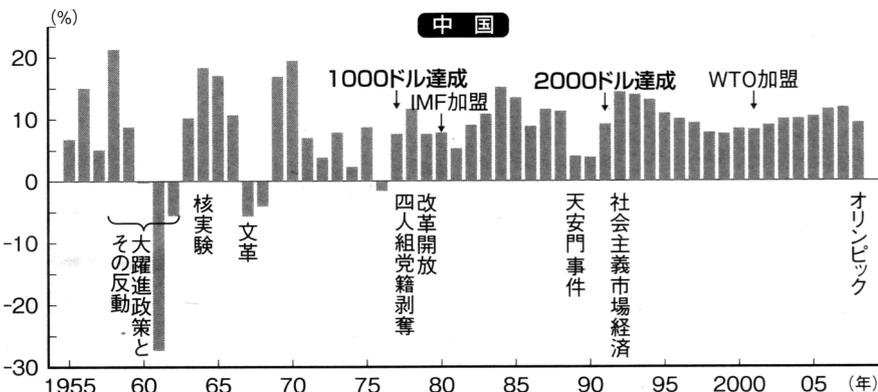
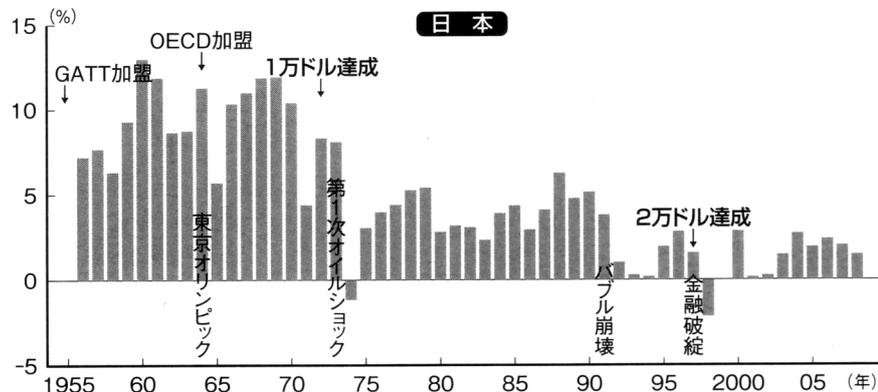
戦争や創造的活動に向いているアメリカ人、平和な生産活動に向いている日本人なのでしょう。



生産活動でも、部品点数が数万点程度の自動車は日本人の得意分野ですが、部品点数が百万点を超える宇宙探査機や兵器システム等になるとアメリカが圧倒的に優勢です。アメリカの集中力を侮ってはなりません。

3. 中国社会とインド社会の寸評

実質GDPの伸び率と1人当たりGDPの達成年



(出所) EcoWin, アンガス・マディソンらの研究をもとに筆者作成

「中国の高成長は何時まで続く？」 藻谷俊介／エコノミスト 2008/9/9

各国の1人当たりGDPの達成年

1人当たりGDP	1000 ^{ドル}	2000 ^{ドル}	1万 ^{ドル}	2万 ^{ドル}
日本	1880年代	1951	1972	1997
台湾	1952	1963	1991	2010
韓国	1960	1969	1994	2008
中国	1977	1991	2014	—
タイ	1956	1975	2013	—
ロシア	1870年代	1930	2016	—
インド	1980	2001	2029 ~42	—

(注)日本は太平洋戦争直前にいったん2000^{ドル}を達成したが、終戦時に1000^{ドル}を下回ってしまった
(出所)アンガス・マディソンらの研究をもとに筆者作成

中国は極めて大規模な天災や人災に何回も襲われて人口が激減した厳しい歴史を持つ国で、国民に政府は信用できないものとの固定観念が定着しています。生き延びるために世界の何処へでも移住・定着する逞しさは日本人では容易に真似できません。移住先で直ぐ小規模の中国人社会を作り、容易に同化されない民族的強さを持つ点は、ユダヤ人に似ています。

思想は極めて現世的で、信頼できるのは親族のみです。祖先崇拜の念が強く、一族の祭祀を絶やさないために男系子孫の継続性を大事にします。独立心が旺盛で、中小企業に向けたメンタリティの持ち主です。西欧に並んで歴史や記録が充実しています。

一世代前の中国のトップリーダー(政治局常務委員)9人の内、胡錦濤主席が清華大学水利工程学部卒(水力発電技術者)を始め、8人までが土木工学、機械工学、電気工学などの技術系出身者で、資源争奪戦等の技術的知識の有無が重要な分野では、政治学科や経済学科出身の日本の政治家ではとても歯が立たない構造的な問題があります。

インドは「ゼロ」の発見者であり、アラビアを通じて合理的な位取り方式を持つアラビア数字を世界に広めた数学の国です。今でこそインド人の数理能力の高さは世界的に高く評価されていますが、私は30代の頃から「インド人の運転手やドアボーイが数十の電話番号を覚えている」「日本のような一桁の九九ではなく、二桁の九九を小学校で教える」と言う話を聞いており、「近い将来に、この方面でインドが伸びる時代が来るだろう」と予想していました。頭が良い民族なのです。

不思議なことに、彼等は歴史や記録を殆ど残さない国民性があります。「インド人は工業国になれるメンタリティを備えていない」と厳しい批評をする人がいますが、私はそうは決めつけられないと睨んでいます。貴方はどちらの意見が正しいか、その結末を見届けることができるでしょう。

4. 人間の能力に合った社会の適正サイズ

……よく知られているのは、人類学者ロビン・ダンパーの「150名が群れの上限」という仮説である。霊長類は哺乳類の中でも大脳皮質がよく発達した動物だが、ダンパーは様々な霊長類について調査し、大脳皮質のサイズと群れのサイズの間に明確な相関関係があることを突き止めた。群れが大きくなると、個体どうしの相互コミュニケーションが複雑化し、その処理が一挙に増大するので、大脳も大きくならざるを得ない。ヒトの場合、大脳皮質のサイズから計算すると、群れのサイズは150になるというのだ。言い換えると、我々ヒトとは、せいぜい100名程度の共同体をつくり、その中でコミュニケーションしながら生きる生物なのである。何千万、何億の人々と一緒に共同体をつくるほどの脳は、残念ながら持っていないのである。……（「生命的な情報組織／ヒトの共同体」西垣通／日本経済新聞 2008/3/11）

……しかし、人間が現代の都市や町に密集し窮屈な思いをするほどまでに、動物の群れを密集させ窮屈な思いをさせようとは、どんなに経験不足な動物園の園長でも決して考えないだろう。人間レベルの異常な集団化は、そんなことになった動物たちの正常な社会パターンを完全に粉々にし、崩壊させることになるだろうと、園長は自信をもって予言するだろう。……ところが、人間は自分自身に対して進んでこういうことをやっている。人間は正にこういう条件のもとに苦勞し、それでなんとか生きている。どの点から見ても、人間動物園は、今ごろは狂声が木霊する気違い病院になり、崩壊して完全な社会混乱状態に陥っているはずである。皮肉屋はそれが正に実状ではないかというかも知れない。しかし、明らかにそうではないのだ。より密集した生活への傾向は、減退するどころか、いよいよ加速度を加えている。……苦勞している超大部族人で、私が論じてきた極端な形の行動に陥る者は、注目に値するほど少ないのである。……このことは、何より以上に、人間という種の強靱な粘り強さ、弾力性、そして創意の本当に驚くべき証拠である。（「人間動物園」p80、Desmond Morris／矢島剛一訳：新潮社）

5. 指導者の孤独

ヒヒの副ボスたちはボスの最悪の競争相手ではあるが、集団外からの脅威が感じられるような場合には、またボスの非常な力にもなる。それに、副ボスたちをあまり強く抑えつくと、彼らは徒党を組んでボスに対抗し、ボスを追放することもある。そこで副ボスたちは、群れの弱い者たちが与ることのできない特権を享受する。……このルールに従わなかった人間の指導者は、皆、困難な事態に遭遇した。人間の指導者は、ヒヒのボス以上に、副ボスたちの助けが必要であるし、「宮廷叛乱」のより大きな危険に曝されている。遥かに大きなことが彼の背後で進行する可能性があるからだ。副ボスたちに報いる行き方には、鮮やかな手際が必要である。困ったことに、真の指導者は本当の友情を享受することができない。本当の友情が完全に発揮されるのは、ほぼ同じレベルの身分の者の間だけである。支配者とどんなレベルの部下との間にも、勿論部分的な友情は成立しうるが、しかし、それは常に身分の相違によって損なわれる。そのような友情の当事者たちがどれほど善意であろうとも、恩着せがましさと阿諛追従(あゆついでいしょう)が何時の間にか忍び込んで、その関係を不純にする。社会のピラミットに立つ指導者は、あらゆる意味において常に孤独である。指導者の半端な友人は、恐らく、指導者が考えたがる以上に半端である。……

（「人間動物園」p50、Desmond Morris／矢島剛一訳：新潮社）

補遺了